

2022/4/17

ヨハネの黙示録 講解メッセージ④

『黙示録を読むに当たって－神の国が来た印－』

ヨハネの黙示録は、終わりの日に関わる預言です。イエス様は、終わりの日のことを「よみがえりの時」、また「神の国の実現」と呼びました。「神の国」とは、「人の子が現れて悪を滅ぼし永遠の国を立てること」だと、ダニエル書はじめ旧約聖書で預言されています。これまで一般的には、それはこれから起こる未来の話であり、その時私たちは永遠のいのちをいただいてよみがえるのだと理解されてきました。しかし、イエス・キリストの言葉を忠実に読み取るならば、イエス様は「神の国は来た」と宣言し、「今が終わりの時であり、あなたがたは永遠のいのちをすでに手にしている」と繰り返し語っておられます。人がこのことをなかなか信じるのができないため、イエス様は十字架に架かって復活し、今がよみがえりの時であることを自ら証しなされたのです。

この前提でヨハネの黙示録を読むと、すでに永遠のいのちを得てよみがえっている私たちが、天国に行くまでの間に出遭う試練について書かれている書であると理解できます。そして、個人的な肉体の死の時、すでによみがえっている私たちは、そのまま天国に行くのだという希望が書いてあるのです。

このことをヨハネの福音書から学びましょう。

■キリストが来られた目的

「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」

(ヨハネ 3:13-15)

この時、イエス様は、初めて「永遠のいのち」という言葉を使われました。「人の子」とは、「人の子が天の雲に乗って来られる」というダニエル書の預言からの引用で、イエス様ご自身のことです。また、「モーセが荒野で蛇を上げたように」とは、民数記で、イスラエルを殺そうとする蛇に対して、神がモーセに青銅で蛇を作らせて旗竿の上に掲げさせ、その青銅の蛇を見上げた者は蛇に咬まれても死ぬことはなかったという出来事を指しており、ご自分の十字架を示しておられます。イエス様はここで、ご自分が何のために十字架に架かるのか、その十字架を信じる者は永遠のいのちを持つということを象徴的に語られたのです。つまり、イエス様がこの地上に来られた目的は、イエス様を信じる者が死ぬことがないように、永遠のいのちを持つためであるということを確認させたのです。

さらにヨハネは次のように解説しています。

「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」(ヨハネ 3:16-17)

神が来られたのは、私たちが裁くためではなく、私たちが救うためです。それは、永遠のいのちを持たせるということです。人間は、生まれたままの状態では、死の体しか持っていません。土に帰るしかない存在なのです。ですから、人は生まれながらに死んでいると言われます。その死人に対して神ができることは、ただ一つ、生きるようにすることです。

終わりの日の裁きとは、あなたは罪に値しない、あなたは生きる者であると宣告することです。私たちがどんなに自分をだめな者、罪人だと言ったところで、神はそれを却下すると言われたのです。それが、裁判官である神の下す判決です。

「御子を信じる者は永遠のいのちを持つ(持っている)が、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」(ヨハネ 3:36)

「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

(ヨハネ 4:14)

イエス・キリストが与える水を飲むことで、人は永遠のいのちを持つようになるとイエス様は言われました。

人とは何かと言われたとき、それは何かを考えたりする意識、つまり精神であると定義されます。精神は、外から入る情報を判断する物差しがあって初めて機能します。プラトンはこれをイデアと呼び、アリストテレスは魂あるいは不動の動者あるいは神の属性などと呼びました。そして、すべてのものの初めである聖書は、それを神のいのちの息(魂)だと教えています。

神は愛ですから、神は、神のいのちによって私たちが造ることで、私たちの中に神の愛があふれ出るようにされたわけです。神のいのちによって造られた私たちは、一人一人が神の思いを発信する基地を持っています。それが私たちの物差しとなって私たちの精神を生み出し、同時に私たちに 24 時間呼びかけています。「私が与える水を飲む」とは、その呼びかけに応答することです。この応答は潜在意識の中で行われるため、自覚することはできないのですが、応答した者はイエス・キリストへと導かれます。つまり、神の呼びかけに応答した者は、永遠のいのちを持ちました。それによって、イエス・キリストの御言葉を聞くことでこの方がまことの神だと信じるができるようになり、イエス・キリストへの信仰を育てることができるのです。その後、信仰を告白し、救われたという自覚に至るのです。イエス様は、このことをさらにわかりやすく、次のように語っておられます。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

ここでイエス様は、「信じている者は永遠のいのちを持っていて、死からいのちに移った」とはっきり語っておられます。「死からいのちに移った」とは「よみがえった」ということです。つまり、「終わりの日は来た」ということになります。しかし、人々は、終わりの日とはこの地上の見える世界が終わることだと思い込んでいるので、イエス様のことばの意味がわかりませんでした。そこで、イエス様は続けて次のように言われました。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

今が救いの時であり、私たちがよみがえる時だとイエス様は言われたのです。つまり、神の国は来たのです。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。」(ヨハネ 5:39)

どうしたら永遠のいのちを持つことができるのかについて、人々は聖書に答えを求めます。ところが、その結果、神の律法を守ればその行いによって救われると理解してしまいました。しかし、その聖書がイエス様について証言していること、それは、イエス様ご自身が永遠のいのちだということです。それは、イエス・キリストを信じれば救われるということです。そして、信じたら、さらにイエス様を信頼するように神は導いておられます。

「なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」(ヨハネ 6:27)

「永遠のいのちに至る食物のために働く」とは、イエス・キリストを信じて永遠のいのちを持っている者が、「イエス・キリストとの関りを深めてさらにしっかりと関係を築く」ということです。それは、「神のことばを信じる」ということです。私たちがこの地上でなすべきこと、それはイエス・キリストとの関係を豊かに持つということです。人間関係においても、ただ人と知り合うことと、その人との関係を豊かに持つこととは別の話です。いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。神を愛する心だけが永遠に残るのです。その宝のために労苦せよと、イエス様は言われました。

「事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

(ヨハネ 6:40)

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。」

(ヨハネ 6:47)

「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」(ヨハネ 6:54)

これらのことばはすべて「信じる者は永遠のいのちを持っているので、終わりの日によみがえらせる」という意味です。(「持ちます」と訳されている部分も、原文は現在形なので「持っている」という意味です。)

そして、これらの御言葉をよく読むと、「終わりの日」は2回あることがわかります。一つは、神に応答した時、すなわち、神が与えた水を飲んだ時です。その時、私たちは死からいのちに移されました。つまり、新しいいのちをいただいて死からよみがえったということですから、それがその人にとっての「終わりの日」です。

そして、もう一つは、この肉体が死を迎える時です。信じた人は永遠のいのちを持っているので、滅びることなく、そのまま神の国に入ります。それがよみがえりです。

ヨハネの黙示録は、この「肉体の死」という終わりの時について語っています。その日までいろいろな苦労があるけれども、私たちはよみがえるから心配いらないとイエス様は語っておられるのです。

「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。」(ヨハネ 10:28)

イエス様は永遠のいのちを得た者は決して滅びることはないと言われました。神が一度確定したことは変わりません。神にとって、『はい。』は『はい。』、『いいえ。』は『いいえ。』であり、曖昧なところはないのです(マタイ 5:37)。このことを、イエス様は繰り返し教えていくのですが、人々はなかなか信じることができないでいました。

そのような時、ある出来事が起こりました。

■ラザロの復活

「さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あな

たが愛しておられる者が病気です。」イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。」(ヨハネ 11:1-6)

ラザロが病気になった時、イエス様は、彼らを愛するがゆえに、彼らのところに行かなかったとあります。それは、彼らの信仰を訓練するためです。

神は私たちの問題を静観することを通して、私たちを本当に神に頼るしかないところまで追い込みます。それは、神以外のものを信頼して生きていることが、私たちの問題だからです。神のことばよりも人の慰めや励ましを求めて、そこに希望を託してしまうのです。しかし、人の言葉も富も、患難にぶつかったら何の役にも立ちません。それを知った時、私たちは初めて神の前にへりくだり、神に頼る者となれます。神はそれを教えたいのです。

「イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいいます。さあ、彼のところへ行きましょう。」そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間に言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

(ヨハネ 11:11-16)

イエス様はラザロが死んだことを知りました。イエス様は今こそ時が来たと、ラザロのもとに行くことにしました。しかし、弟子たちは、イエス様が語っておられることをまったく理解できていないことがわかります。イエス様が弟子たちに伝えたかったことは、死人が生きる時が来て、あなたはもう新しい人を着てよみがえったのだということです。しかし、現状は何も変わらないため、誰も信じることはできませんでした。

「マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」(ヨハネ 11:21-24)

マルタはイエス様に向かってつぶやきましたが、なんとか信仰に立とうとしています。そ

ここでイエス様は、はっきりと「ラザロはよみがえる」と宣言なさいました。しかし、マルタは、「終わりの日のよみがえりのことですよね」と返答しています。

イエス様はこれまでも、「私を信じる者はすでに永遠のいのちを持っているから、滅びることはない」「あなたはもうよみがえった、これからよみがえるのではない」と何度も言っています。しかし、マルタは「それは終わりの日のことだ」と勝手に信じ込んでいます。世界の終わりのときに最後の審判があってその時によみがえるのだと思い込んでいたので、イエス様のことばが少しも入ってこないのです。

そんなマルタにイエス様はさらに語り続けます。

「イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」

(ヨハネ 11:25-27)

「私を信じている者は決して死ぬことはない」ということは、ラザロは死んでいないということです。確かに肉体は滅びましたが、ラザロは今生きてるとイエス様は言っているわけです。つまり、マルタが信じている「終わりの日のよみがえり」は、間違いだということです。

しかし、「それを信じますか」と聞かれたマルタは、「はい、信じます」とは答えられませんでした。「だって、ラザロは死んでいるじゃないか」……これが、彼女の気持ちだったことでしょう。それで、イエス様の質問に対する答えとしては的外れではありますが、彼女の信じる精一杯を告白したのです。弟子たちもここに至る道中で、「ラザロをよみがえらせに行く」というイエス様に対して、まったく見当違いの返答をしています。つまり、弟子であっても、熱心なクリスチャンであっても、終わりの日について勘違いしていたということです。

イエス様は、これ以上話してもマルタは理解できそうにないので、次にマリヤをお呼びになりました。

「マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかると、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。」(ヨハネ 11:32-35)

以前、主の足元で誰よりも熱心に御言葉を聞いていたマリヤでさえつまづいたのです。イエス様は、この人々の様子を見て、涙を流されました。イエス様が繰り返し、永遠のいのちのことを語っておられるのに誰も信じる者がいない、そのことに霊の憤りを覚えたからです。

しかし、人々は、イエス様の涙の意味を理解しませんでした。主が自分たちの不信仰、神のことばを信じないことに対して涙を流されたことに気づきませんでした。

「そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」(ヨハネ 11:36-40)

この後、イエス様はラザロを復活させます。それは、一度は神の国に入ったラザロを肉の体に戻し、地上に戻したということです。なぜそのようなことをしたのか、それは、彼らがラザロはそのまま天国に移されたことを信じなかったからです。ラザロは死んでいないことを見える形にしてくださったのが、ラザロの復活です。

「神の国は来た」という信仰を訓練するために、イエス様はラザロが息を引き取るのを静観されました。私たちは苦しみに会うとつぶやきますが、後になると、そのことを通して神のことばを本当に知ることができたと感謝するものです。こうして神を信頼することの大切さを学ぶのです。それがラザロの復活です。この後もイエス様は永遠のいのちのことを教え、最後にはご自分が十字架に架かり、復活して、私たちが永遠のいのちを持っていることを伝えてくださっています。「復活を信じなさい。それはいつか起こることではなく、今あなたは死からいのちに移されていて、永遠のいのちを持っていることを信じなさい。何があってもあなたは必ずよみがえるから心配はいらない。」これがヨハネの黙示録の主題なのです。